今おーらむ 京

宗教間対話 京都モデルは可能か

摩擦の中で次世代育成を

同志社大教授　小原克博

国際会議などに参加した際に「京都から来た」と言うと「ああ、京都議定書の京都ですね」と返答されることがよくある。日本通の外国人であれば、古都としての京都を思い浮かべることもできるのだろうが、国際社会における京都の理解のされ方は、徐々に変わってきているようだ。

私は伝統ある古都として京都が理解されていないことを嘆いているのではない。むしろ、一九九七年に採択された「京都議定書」が、温室効果ガスの排出規制のための世界的モデルとして広く意識されていることを誇らしいとさえ思っている。その目標達成が危ぶまれていることは嘆かわしいが。

現代世界には、地球温暖化にかぎらず、深刻かつ複雑な問題があふれている。複雑な問題を着実に解決していくためには、どの分野においても、先導するモデルが必要だ。環境問題と並んで、二十一世紀の人類に重くのしかかっている問題の一つはテロや戦争だろう。そこに宗教的イデオロギーが絡んできた場合には、いっそう厄介である。では、解決のモデルはあるのか。

近年よく語られるのは「一神教VS多神教」モデルである。それによれば、世界中の紛争のほとんどはユダヤ教・キリスト教・イスラーム教といった一神教に原因があり、また、今日の環境破壊は西欧キリスト教の人間中心的な自然理解に由来するという。他方、仏教や日本の伝統的多神教は自然を愛し、神々の間の争いもない。だからこそ、これからは世界に対し、日本の多神教的な精神を発信していくべきだ、というのである。

この種の紛争解決モデルにおいて、わたしが感じるのは、多神教の世界貢献といった華々しい表現とは裏腹に、それが非常に内向きで自己満足的だ、ということである。一神教か多神教かという二者択一は、日本社会には「わかりやすさ」という快感を与えるかもしれない。しかし、こうしたメッセージは同時に誤解・偏見・差別を助長しているのではないか。

また「神々の国日本」を一神教と安易に対置させることは、「文明の衝突」という世界図式を前提とし（大東亜VS西洋）、その中で一国文明史を語ろうとした「いつか来た道」にもつながっていく。いずれにせよ、この種の提言は国際社会の中でのモデルとはなり得ない。

ついでに言えば、宗教のトップエリートたちをお金をかけて集め、対話の場につかせるような意味での宗教間対話にも、私は多くを期待していない。そうしたサロン的対話を何百年続けたとしても、実社会にはほとんど影響を与えないからである。平和の希求が声高に叫ばれるほど、地に足のつかない宗教の実相を見る思いすらする。

きわめて悲観的な言い方になってしまったが、私は「京都議定書」が果たしているような先導的ビジョンを、京都の伝統宗教の中に見いだしたいと願っている。伝統は新しいものに対して非寛容である場合が少なくない。しかし、種々の分かたれた伝統を再接近させ、よい意味での摩擦エネルギーを新しい世代に注ぎ込むことができたならば、何かが変わり始めるのではないか。

今年七月、大谷・高野山・種智院・同志社・佛教・龍谷の各大学院（大学）が協力して「京都・宗教系大学院連合」が設立された。次世代の宗教指導者や研究者を共同して育てていこうという目的がそこにはある。

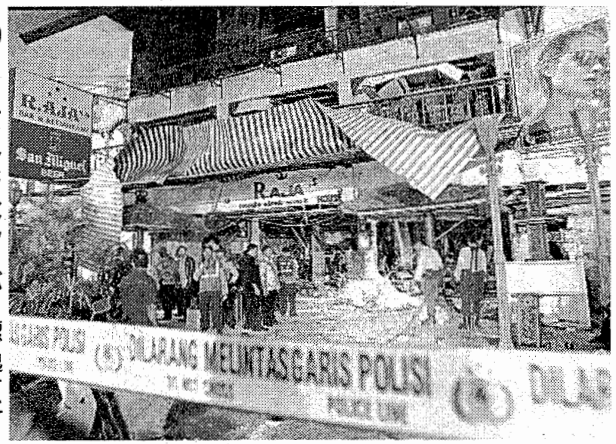
百三十年前、同志社が京都の地に設立されたときには、キリスト教に対する仏教からの敵対心は非常に強く、新島襄は批判の矛先をかわすので精いっぱいであった。そうした時代から見れば隔世の感があるが、それぞれの伝統の中に時代の要請に応えようとする機運が芽生えたからこそ、大きな決断がなされたのだと思う。

人を植え、育てる土壌としての京都。その可能性を信じ、努力を惜しまないなら、宗教間対話の京都モデルは、世界に対しユニークな貢献を果たすに違いない。

◇

京都ゆかりの文化人や研究者に、社会や文化の事象について考察してもらいます。月曜に随時掲載。

こばら・かつひろ氏　1965年大阪府生まれ。同志社大大学院神学研究科博士課程修了。神学博士。専門はキリスト教思想、宗教倫理学。生命倫理、エコロジーなど多様な学問領域を切り口に現代社会が直面する課題に取り組む。



10月1日、インドネシア・バリ島で起きた爆弾テロ（ロイター＝共同）